

資料紹介

石黒馨編『ラテンアメリカ経済学——ネオ・リベラリズムを越えて——』世界思想社 2003年
280ページ

本書は1980年代の経済危機と90年代のネオ・リベラル経済改革をふまえて書かれた、ラテンアメリカ経済に関する最新のテキストである。本書は3部構成となっており、第1部ではラテンアメリカにおける経済開発戦略が国家主導型戦略から市場重視戦略へ転換したことが述べられている。第2部ではマクロ経済が扱われ、経済成長とインフレ、対外債務、金融問題、財政、雇用について分析が行なわれている。第3部ではミクロ経済が扱われ、一次産品と大土地所有制、工業化、公企業の民営化、直接投資と技術移転、経済統合と域内分業が分析されている。

本書を貫いている基本的視点は、1990年代にラテンアメリカ諸国で実施されたネオ・リベラル経済改革とその結果を分析し、はたしてネオ・リベラル経済政策がラテンアメリカの抱える経済問題を解決し得たのかどうかという点である。答えは、部分的に見るとネオ・リベラル政策の効果を評価している箇所もあるが、全体としてネオ・リベラル政策ではラテンアメリカの経済問題を解決するには問題が多いとしている。ネオ・リベラル政策に関する論文や著作は多いが、本書のようにその結果を含めて多岐に分析した日本語文献は少ない。その意味で本書は、ラテンアメリカ経済の最新のテキストであると同時に、ネオ・リベラル経済政策に替わる道を探るための手がかりを与えてくれる書であるとも言える。

(宇佐見耕一)

安原毅著『メキシコ経済の金融不安定性金融自由化開放化政策の批判的研究』新評論 2003年
xv+302ページ

筆者が依拠するポスト・ケインジアンのマクロ経済理論は、投資が貯蓄を生み出すという論理構成を持っていて、投資は貯蓄により制約されると考える

新古典派総合とは正反対の立場をとる。本書では、投資が利潤を生み続ければ制度的に安定するが、そうでない場合に借金を返済するために追い貸しが行なわれるような金融システムはリスクを累積し金融危機に結びつく、というふうに危機の発生を内生的に捉えた現実的な視点が提供されている。第3部で報告されている実証分析結果は、この仮説が1990年代のメキシコ経済で概ね支持されるという興味深いものである。第2部（理論編）に散見される数式の誤記や文中数式番号の指示の混乱はあるものの、理論と現実の対話に挑んだ意欲的な研究書と言えよう。

(浜口伸明)

丸谷雄一郎『変貌するメキシコ小売り産業経済開放政策とウォルマートの進出』白桃書房 2003年
ix+146ページ

経済グローバル化の荒波を受けて近年メキシコの企業体制は大きく変貌を遂げつつある。本書が扱う小売業も例外ではない。旧来の小売業は、老舗デパート、大手スーパー、個人商店、露天商といった具合に、資本規模、業態、顧客層ごとに階層化され、各階層毎に地場資本主体の安定的秩序が維持されていた。1997年に米国ウォルマートがスーパーの最大手シフラを買収したことで、そのような秩序が突き崩された。着々と地歩を広げるウォルマートに対抗するために、迎え撃つ地場資本の側も生き残りをかけて変革を余儀なくされている。本書はそのような変化のただ中にあるメキシコ小売業の概況を紹介している。

本書の特徴はウォルマートの進出に焦点をあてながらも、それにとどまらず、露天商の歴史と政策、消費者の購買行動の変化など、幅広いテーマを拾いメキシコ小売業の現状を俯瞰しようとしている点にある。惜しむらくは、章をかえて論じられる諸テーマの相互間の関連にまで考察が及ばないために、メキシコ小売業が総体としてきれいな像を結んでいない点である。また統計や既存研究の紹介が多く、分

析のオリジナリティーという点でも物足りない。

とはいえ日本でもウォルマートの脅威が喧伝される昨今、先達のメキシコの事例を紹介する本書の意義は大きいと考えられる。(星野妙子)

鈴木康久著『メキシコ現代史』明石書店 2003年
260ページ

本書は、メキシコの近代発展の基礎を作ったポルフィリオ・ディアス政権から現在までの約100年間の歴代政権の政治と外交の軌跡をわかりやすく説明してくれるメキシコ近代史の概説書である。

構成は、第1章でポルフィリオ・ディアス政権の近代国家建設、第2章で革命の第一段階の混乱期、第3章で革命後に制定された1917年憲法の施行時代、第4章でラサロ・カルデナス政権による国家建設時代、第5章でメキシコが目覚しい経済発展を遂げた1940年から70年まで、第6章で経済危機をポピュリスト的な開発政策で乗り越えようとした70年代、第7章で1982年の債務危機以降メキシコ制度的革命党政権が保護主義経済と訣別し市場原理主義に立脚した新しい経済発展戦略へと転換を図っていった軌跡と、2000年の大統領選でビセンテ・フォックス国民行動党候補に政権を明け渡すまでの政治的動向が、時系列的に簡潔な筆致でまとめられている。

メキシコ現代史がわかりやすく説明されており、メキシコ研究の入門書として手元に置いておきたい一冊である。(村井友子)

フリオ・レ・リベンド著、本間宏之訳『キューバ経済史——新大陸発見から植民地主義克服まで——』エルコ 2002年 283ページ

本書は、ハバナ大学で長く教鞭を執った歴史家フリオ・レ・リベンドによるキューバ史である。原書は1975年に刊行され、国史教科書としてキューバ国内で広く読まれている。構成は副題のとおり、先コロンブス時代からキューバ革命成功直後の60年

前後の時期までを時系列で扱っている。歴史の中でも経済的側面を中心に扱っており、スペインの植民過程における土地問題や農業の成立、宗主国スペインの凋落、奴隷制の発展と衰退、製糖業の勃興、帝国主義と資本移動などのテーマがそれぞれ論じられている。

大変興味深い点は、スペインの植民地政策や奴隷制、キューバ独立運動など、従来政治的、社会的側面から分析されることの多かったテーマが、すべて経済的観点に絞って述べられていることである。それらのテーマの中で独立後の米国による経済支配についてはいくつか著名な研究があるが、それ以前の時期についてはあまり知られておらず、読者の関心を集めると思われる。またキューバの対外経済関係が、それぞれの時代の世界情勢に対応した形で説明されており、日本人でも世界史の知識をたぐりながら読むことができるので、大変わかりやすい。

本書はマルクス史学的観点から分析されており、その分析手法は必ずしも多くの共感を得るものではないかもしれないが、それを補って余りある豊穡さを備えている。訳者は大手商社出身で、長くキューバとつき合ってこられた方であるが、本業の傍らキューバ国内の優れた研究書を訳出してこられた。その努力に賞賛を送りたい。(山岡加奈子)

シッコ・アレンカール；ルシア・カルピ；マルクス・ヴェニシオ・リベイロ著 東明彦；アンジェロ・イシ；鈴木茂訳『世界の教科書シリーズ 7 ブラジルの歴史——ブラジル高校歴史教科書』明石書店 2003年 749ページ

本書は、初版が1979年に発行されたブラジルの中等教育課程(15~17歳)用の歴史教科書の改訂版を日本語に訳したものである。ブラジル「発見」以前から90年代半ばまでのブラジルの歴史を植民地期、帝政期、共和政期の三つに大別し、全体を16の章に分けて解説している。本書にはいくつかのコラムが

資料紹介

各時代の補足説明として挿入され、各章の終わりには、その時代の背景を民衆の視点から解説した「歴史と生活」と有名大学の入試問題を紹介した「大学入試への架橋」が掲載されている。

本書は原題が『ブラジル社会の歴史』であり、旧来の歴史学および歴史教育においてあまり語られてこなかった「民衆」、つまり大部分の「ブラジル人自身」を中心に据えたブラジル社会の歴史解釈を試みている。したがって、今までに日本で紹介されてきたブラジル史とは異なり、ブラジル社会の形成のダイナミズムをその主人公である民衆の視点から学ぶことができる貴重な書であるといえる。(近田亮平)

松久玲子編『メキシコの女たちの声 メキシコ・フェミニズム運動資料集』行路社 2002年 505ページ

本書は、1998年以來のメキシコと日本の研究者による共同研究の成果であり、同志社大学人文科学研究所研究叢書XXXVIとして出版された。

第1部は、フリア・トゥニョンが執筆、編集したアンソロジー(資料集)であり、1873年から1953年(女性の参政権獲得)まで、フェミニストたちの著書、論説、雑誌記事、女性会議記録などを時期別に配列しており、時期毎に日本人研究者が解説を加えている。

第2部は、マリア=ルイサ・タレス、マルタ・トーレス=ファルコン共著、共編のアンソロジー(資料集)であり、1970年代以降最近まで、階層、民族、政治的に多様な女性の声(論説、会議記録などに加え、インタビュー、調査結果など)を、「妻・主婦・母としての女性」「公的生活：多様な運動とその担い手たち」「政治参加」「身体と民主主義」のテーマ別に配列してある。

本書は、フェミニズムに関心のある者に豊富な資料を提供するものであるが、同時に、メキシコの歴史や社会についてある程度予備知識を持つ者も、自らのメキシコ理解を深めるために利用することがで

きよう。

(米村明夫)

Heidi Dahles and Lou Keune, *Tourism Development and Local Participation in Latin America*, New York: Cognizant Communication Corporation, 2002, 177 p.

世界の多くの途上国が経済開発の手段として観光に注目している。ラテンアメリカも例外ではなく、ビーチ・リゾート、民俗・文化、環境・エコツーリズムなどを売り物にした観光開発が各地で行なわれている。本書は観光人類学のアプローチによって、従来の大規模開発とは異なった地域社会を基盤にした観光開発の姿を、現地の文化や社会との関わりや、地元住民やNGOの参加に焦点をあててとらえようとしたものである。

本書10章のうち、事例研究の4章はオランダの大学院生が修士課程の一環としてそれぞれコスタリカ、エルサルバドル、ベリーズ、エクアドルに4カ月滞在して行なった観察やインタビューなどのフィールド調査がもとになっている。それ以外の章は、ラテンアメリカにおける観光の経済的重要性、カリブ諸国の政府と企業による観光開発、観光産業におけるジェンダーの問題などが、統計資料や先行研究を用いてまとめられている。観光開発の具体的な事例について地域の人々に比較的近い視点からその過程、可能性、問題点がまとめられている点が興味深い。

(清水達也)